

フランク・ロイド・ライトのユニティ・テンプル (1906-1908)

— 「空間」表現の意識的な出発点としての

服部真吏 (慶應義塾大学)

現在では「空間」という語を使わずに建築を語ることは不可能なように思われるが、意外にも空間が建築を語る言語として定着するのは、1941年にジークフリート・ギーディオンによる『空間・時間・建築』(*Space, Time, Architecture*)が出版されて以来のことで、まだ70年ほどしか経っていない。それ故に、あるいは、それにもかかわらず、建築において「空間」が何を意味するのか、必ずしも明確であるとは言えない。そこで、発表者は、後年の本人の発言から最初に空間の表現を意識したとされる、フランク・ロイド・ライト(Frank Lloyd Wright 1867-1959)によるユニティ・テンプル(Unity Temple 1906-1908, Oak Park IL)に立ち返って、建築における空間表現の意味について考察したい。

ユニティ・テンプルに関する研究は、ライトと同時代の研究者によるものが多く、近年ではジョセフ・M・シリーによる一次資料に基づいた緻密な研究が評価されているが、本作品をライトにおける空間表現の意識的な出発点として解明することは、未だ十分に試みられているとは言えない。発表者は、ライト自身の文章から「空間」と「ユニティ・テンプル」に関する記述を集め、また2013年に公開されたライト・アーカイヴに現存するユニティ・テンプルのドローイングの全てについて調査・分析した。

ライトによる「空間」という語の用例を追っていくと、それぞれの意味が時代によって異なっていることがわかる。ライトの空間概念は、内と外との対立を示すものから両者の連続性を示すものへと変化している。このような変化は、師のサリヴァンから受け継いだ「プラステシティー」という、もともとは装飾に関する概念を建築全体に拡張することによって生じたと考えられる。ライトの「プラステシティー」とは、言わば、視覚化された連続性であり、素材のコンクリートや内部のトリムはこの性質をよく示している。

ユニティ・テンプルが、回顧的にではあるが、同時代の他のライト作品よりも「空間」を強く意識させた理由には、それが教会であったことがある。しばしば比較されるラーキン・ビルの均質な執務空間とは異なり、教会ではそれぞれの部屋の機能と品位を表現しながら、建築空間全体における部屋同士の調和が求められた。この解決にライトが苦心したことは、1905年から1908年の間に繰り返し描かれたオードトリウム内の透視図からも窺える。内部のトリムのデザインには、部分と部分との連続性、部分と全体との調和が一貫して試みられている。

ユニティ・テンプルは、このような部分と全体とを連続的に調和させる試みが活かされているからこそ、「空間」表現の出発点として評価されたのである。これは、のちに「住むための内なる空間」として捉えられるライト独自の空間把握の最初の試みであったと言える。